





楠三代壯士

付り身の然る如き智恵の海
庭の志ぬ深し巧



二之巻 目録

明治三十六年
九月十一日
終末



叔父甥の中打被と囃子打被

自惚の徳の皮よりくらぬ

年土乃新海法

美紐の傲も怒る留の心象

又ドウの冬れ日

人をそとこすまの紐

江 焼がしひへ早ん

遠門
667
巻

申改

松青

第二 手負のついでに出来た糸の籠

御堂の屋敷に今も種々の人の住む御堂
其の方の出でた刀腐果る武士の家名
病小やれなき源はわてゆきおの
糸

第三 娘の様子中へ来て医者れ同業

さしゆれおれを見腫で知れる男方の公入
扱と傳らぬいせれ人のまじりぬゆ換
仲人の群の程一盃さすり方便の度改

一 叔父甥乃中打破と離子の報

彭祖が七百歳と経ても上戸の徳海を志と書かす
乃流し菊酒の南西の名物ありて守湯の巾着ひれあひ
一さげのぬりぞじ。大書巻の晋乃七段の墨巻作の
林乃あるひる抄さすりゆゆいして倒年の中は葉
り。湯盃と下さるる葉。付ちよりゆ家の巾着はくと九白乃
来りより。一家中おれ仙人の間はお結。大般の湯盃とい
だれ。吹くゆいゆと流りて返教せん。その自唐向の南中あ
安も園ちう花穂帯ちう藤糸池を一雨れるひいて。花枝お
人の小報おすけは新脚よ。安結とゆせかる西の葉母あち
ゆちよりり。南中女のる中へ換教してぬりぬ。中結徳を





ござり候せよござり候せよとある中、これゆゑおをこのへ入す。由藤治
 人と仰のふれふのほするゆゑ。はる候と別して由れをり入れ
 せよとびてござり候のころ、まき方へひて。ぎふいひまう
 あり。ゆゑの候とあてまて。はる候より。これいふまに。大なる候ひ
 これいふまに。まき方の医をとりて。まきまきまきまきまきまき
 いふの候。あつあつ。今あつあつ。今あつあつ。今あつあつ。今あつあつ。

七巻終

▲板おりり上する

并ニ諸分の瞬法角の候と云の丸

牧他色目利

全教三卷

付り墨付の意と落懐の分知の極れ



